

(6) 2003年11月28日 大谷大学図書館報(第21号)

貴重資料紹介 (17)

北京版西藏大蔵経について

兵 藤 一 夫 (教授・仏教学)

本学所蔵の北京版西藏大蔵経は、文末に一覧するように、すでに総目録や影印冊子本が出版されて久しく、また、北京版西藏大蔵経を中心として、デルゲ・ナルタン両版、サンスクリット原典及び漢訳を対照した勘同目録も編纂・出版されているので、仏教を学び研究する人たちに周知され実用に供されていると思われる。特に、影印版の出版は、同じ文献を所蔵するバリの国立図書館での閲覧が困難なこと、この15年ほど前まではデルゲ版等の他版の西藏大蔵経も容易に見られなかったことなどを考慮すると、仏教研究や西藏研究の発展に大きく寄与したことは多くの認めるところである。貴重資料の公開の意義の大きさを実感させられる。このような状況の中で、北京版西藏大蔵経について今更新しく書き記すようなことはないが、仏教学の立場からその資料としての特徴や意義について幾つか想うところを述べてみよう。

まず、北京版西藏大蔵経の内容を北京版総目録によって概観しておく。周知のように、チベット大蔵経は経・律・論の三蔵の分類を採用せず、カンギュル（仏説の翻訳）とテンギュル（注釈の翻訳）の二つに分類される。経は仏陀が直接説かれたあるいは承認されたものであり、律は仏陀が制定されたものであるからカンギュルに相当し、論は仏説を注釈したものであるからテンギュルに相当する。本学所蔵の北京版西藏大蔵経は、総巻数359、内容点数5470（若干の重複が認められるから実数はこれよりも少ない）、影印版巻数168（但し最後の4巻は影印版のための内容目次・索引）である。その内訳は以下のようである。

I. カンギュル（甘殊爾）

- (1) 秘密部（北京 Nos.1-729、第1～25巻）
 - (2) 般若部（北京 Nos.730-759、第26～49巻、但し第48巻重複）
 - (3) 宝積部（北京 No.760、第50～55巻）
 - (4) 華嚴部（北京 No.761、第56～61巻）
 - (5) 諸経部（北京 Nos.762-1029、第62～93巻）
 - (6) 戒律部（北京 Nos.1030-1055、第94～106巻）
- 〔目録（第107巻）：蒙・満・漢の対訳を含む〕

II. テンギュル（丹殊爾）

- (1) 讃頌部（北京 Nos.2001-2063、第108巻）
 - (2) 秘密疏部（北京 Nos.2064-5183、第109～195巻）
 - (3) 般若部（北京 Nos.5184-5223、第196～211巻）
 - (4) 中観部（北京 Nos.5224-5480、第212～228巻）
 - (5) 諸経疏部（北京 Nos.5481-5520、第229～238巻）
 - (6) 唯識部（北京 Nos.5521-5586、第239～256巻）
 - (7) 阿毘達磨部（北京 Nos.5587-5604、第257～267巻）
 - (8) 律疏部（北京 Nos.5605-5649、第268～285巻）
 - (9) 本生部（北京 Nos.5650-5657、第286～289巻）
 - (10) 書翰部（北京 Nos.5658-5699、第290～299巻）
 - (11) 因明部（北京 Nos.5700-5766、第300～310巻）
 - (12) 声明部（北京 Nos.5767-5794、第311～312巻）
 - (13) 医方明部（北京 Nos.5795-5801、第313～317巻）
 - (14) 工巧明部（北京 Nos.5802-5819、第318巻）
 - (15) 修身部（北京 Nos.5820-5831、第318巻）
 - (16) 雑部（北京 Nos.5832-5962、第318～331巻）
- 〔目録（第332巻）：蒙・満・漢の対訳を含む〕

III. 統編（西藏撰述部）

- (1) ツォンカパ（宗喀巴）全書（北京 Nos.6001 - 6210、第333～352巻）
- (2) チャンキャ（章嘉）全書（北京 Nos.6211 - 6453、第353～359巻）

北京版西藏大蔵経を請来した寺本婉雅は自

筆の西藏大蔵経目録(甘殊爾部1巻、丹殊爾部2巻、余洋1242)を残しており、その甘殊爾部の冒頭には「西藏語大蔵経将来之顛末」、丹殊爾部には「西藏大蔵経丹殊爾部目録序」が記されている。それによれば、北京版西藏大蔵経は清の康熙帝が勅旨を下して、シャルのセルカン所蔵の大蔵経(写本)を底本とし、ラサのプルナン法輪殿、レブン、セラ、ガンデン寺などのものを参照校勘して康熙26~29年(1687~1690)に刊行したこと、その後、雍正帝が雍正2年(1724)に蒙古の必力克圖諾門汗の上奏により宗喀巴全集と章嘉全集を増入して刊行したこと、が伝えられている。

ただ、チベット大蔵経としては、テンギェルには一般に特定の宗派の著作を含めないもので、ツォンカバとチャンキャ(いずれもゲルク派)の全集を除外したものをテンギェルとするのがよいであろう。(ちなみに、大谷大学編の勘同目録ではこの二つを除外している)現存のデルゲなどの他版も統編や補遺として自派の主要文献を附加しているが、カンギェルとテンギェルとしては、諸版の基礎となった「旧ナルタン大蔵経」において確立されたそれをほぼ堅持している。

チベットへの仏教の伝来は、7世紀後半から始まり、13世紀初頭にインドで仏教が滅亡するまで継続するが、チベット側の事情で9世紀後半~10世紀前半にかけて中断するので、一般に前伝期と後伝期の二つに分けて考えられる。仏典の翻訳は8世紀後半になって本格的に開始され、前伝期は主に大乘の顕教のものが、後伝期は密教のものが翻訳された。

14世紀になって、ナルタン寺のチョンデン・リクレルとウーパ・ロセル師弟が中心となってそれまでの翻訳仏典の収集・書写作業が進められ、カンギェルとテンギェルに分類された形で初めてチベット大蔵経が編纂され、目録が作られた。これが「旧ナルタン大



寺本婉雅自筆の北京版西藏大蔵経目録

蔵経」(写本)である。このカンギェル、テンギェルに対して、プトン(1290-1364)が補訂を加え、ここに以後のチベット大蔵経の基礎となるものが完成する。『プトン仏教史』には經典目録が付属しているので、その時の大蔵経の内容が知られる。西岡祖秀『『プトン仏教史』目録部索引』I、II、III(『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』Nos.4-6、1980-1982)によれば、プトンの目録の叙述順序は、顕教の經典、顕教の論疏、密教の經典、密教の論疏、チベット人の著作となっている。この順序はインド仏教史を考慮したためであろう。西岡はプトン目録に番号を付けて北京版番号との対照表を作成しているが、それによると、全体的にはほぼ両者は対応している。プトンが未得文献として列举するものは、北京版にも含まれないものが多い。また、チベット撰述文献は200点余りが列举されるが、北京版(雑部)に含まれるものは28点ほどである。

以上のことを考慮しながら、北京版西藏大蔵経を見ると幾つの特徴(これはチベット大蔵経の特徴でもある)が浮かび上がってくる。一つは、密教が最も重要なものとして収

められていることである。典籍数で言えば、カンギュルでは約7割を占め、テンギュルでは実に8割近くを占めている。密教は短い典籍が多いので、分量としてはそれほどではないが、重要度は明白である。二番目は、密教を最終階梯として設定しながらも、顕教(特に大乘の菩薩道や空思想)をきちんと踏まえていることである。そのために、おおかたの大乘經典や中観・唯識の大乘論書が収蔵されている。ツォンカバを開祖とするゲルク派にそのことが最も顕著であるが、他の宗派でもその方向性は堅持されている。このことは、チベットが導入しようとした当時のインド仏教の性格を映し出したものであろう。特に、前伝期の大事な時期にシャーンタラクシタやその弟子のカマラシーラを招き、サムエ寺の論争に勝利して彼らの伝えるインド仏教が後のチベット仏教の基礎になったこと、また、後伝期にアティーシャを招いたこと、がその特徴を決定づけたように思われる。前の二人は後期インド仏教の瑜伽行中観派の勝れた学僧であり、アティーシャは般若經を基礎にした修習法に勝れた学僧であった。二番目とも関連するが、三番目として、チベット仏教のもう一つの特徴が明らかになってくる。それは、論理学の重視である。インド仏教では、7世紀のディグナーガ(陳那)やダルマキールティ(法称)以降、論理学が発展し仏教の諸問題の論証に使用されるようになってゆく。インドの仏教界全体がその傾向を持っていたであろうが、シャーンタラクシタ師弟はこの面でも勝れた学僧であった。北京版大蔵經で見ても、論理学に相当する因明部(典籍数67、箴数21)はかなりの分量であって、そこにディグナーガやダルマキールティの主要な著作は後代の注釈を含めてほとんどが収められている。ちなみに、大正大蔵經の因明関係の典籍は第31・32巻に含まれる数点であり、ディグナーガの『観所縁縁論』『因明正理門論』などがあるにすぎない。

チベット大蔵經の特徴は、インドからの仏教導入の時期に大きく依存していると思われる。紀元前5世紀(あるいは6世紀)にインドに起こった仏教は、インド内部において、盛衰を織りなしながら変容・展開してゆくが、二度にわたって自ら大きなうねりを引き起こしている。一つは、紀元前後から5世紀にかけての大乘仏教であり、もう一つは7世紀頃から始まる大乘仏教の密教化である。この密教化は、13世紀初頭にイスラームによりナーランダやヴィクラマシーラ僧院が破壊されてインドにおいて仏教が滅亡するまで続くのである。

仏教は、インドにおいて変容・展開する中で、アジア各地に伝播して、それぞれの地域で既存の文化・民族性と融合しながら特色ある仏教文化を形成し、今に至っている。その主なものは、スリランカ・東南アジアなどの南方仏教、中国・朝鮮・日本などの東アジア仏教、チベット仏教である。そして、それぞれの仏教の伝統の中核となってきたものが、聖典としての三蔵、あるいは大蔵經である。

これまでこれら各地域の仏教はその趣が相対的に異なっていることが言われてきた。その理由として、その地域の文化的伝統・民族性などが挙げられることが多い。しかし、上で見たように、各地域が伝持してきた大蔵經の内容の中に、その仏教の性格が見て取れること、逆の言い方をすれば、大蔵經がその仏教の性格を規定していること、にもっと注意する必要がある。その大蔵經の内容はインドから仏教を受容する時期、すなわち、その当時のインドの仏教の性格(三蔵)に大きく依存しているのである。

そのことは具体的に確かめることができる。南方仏教のパーリ三蔵(南伝大蔵經)は、前3世紀から紀元前後頃にインドの一部派である上座部のものがパーリ語のままで伝えられたと考えられている。したがって、三蔵の内容は主に大乘興起前の部派仏教のそれであ

る。また、漢訳大蔵経は、周知のごとく、主として2～9世紀に翻訳されてきたものである。その内容は、阿含から密教までと多岐にわたるが、中心となるのは密教化以前の大乗仏教である。大乗仏教の受容を通して東アジアでは禅宗や浄土教のような独自の仏教が展開するのである。翻訳の最終時期がインド密教の成立時期に符合したため、一部の者たちは最新の仏教として密教を受容したが、その後の展開したインド密教を受け入れることはなかった。これに対して、チベット仏教は、上に見たように、顕教として大乗の菩薩道や空思想を踏まえた上で密教へと進みゆくのである。これはまさに8世紀以降のインド仏教の目指したものであったのである。このことは、一方では、阿含などの初期の経典とアビダルマ論書は、それぞれ70と20程度であり、顕教の大乗仏教を学ぶために必要最小限のものしか翻訳収蔵されなかったことにつながっている。

チベット大蔵経には幾つかのチベット撰述文献が収蔵されていることを述べたが、これに該当するものは『翻訳名義大集』『二巻本訳語釈』、チベット語文法の文献、イエシェデやベルツェクの著作など、前伝期の重要なものばかりである。それらはどの宗派にも属さないため、散逸してしまうことを恐れて、プトンら「旧ナルタン大蔵経」を編纂した者たちが大蔵経に加えたと推測される。

他のチベット大蔵経の特徴として、翻訳が逐語的であり、『翻訳名義大集』などにより訳語が統一していること、翻訳の信頼性が高いことなどはこれまでもよく指摘されている。サンスクリット原典の多くが散逸している現状の中で、チベット訳として唯一現存しているもの（特に8世紀以降のもの）も多い。大乗経典や論書に関しては漢訳との批判的読解に有効である。また、運良くサンスクリット写本が発見された場合も、不完全な写本の校訂に大いに役立っている。



真宗総合研究所のHPの一画面

最近、人文科学の多くの分野で資料や文献のデジタル化が急速に進んでいる。チベット語文献に関しても例外でなく、チベット大蔵経や蔵外文献のかなりの数が入力されており、また、デルゲ版大蔵経はCD-ROM化されている。本学でも真宗総合研究所の西藏語文献研究班においてマッキントッシュ用のチベット語システム Tibetan Language Kit for Macintosh を開発し、それを使用して北京版西藏大蔵経目録や蔵外文献目録のデジタル化を行ない、その一部は当該サイト (<http://web.otani.ac.jp/cr/twrp/index.html>) で公開している。また、同研究所のデータベース研究班では北京版西藏大蔵経の精細なデジタルカラー画像の撮影に取り組んでいる。

北京版西藏大蔵経に関連する出版物等：

- ・『影印北京版西藏大蔵経』168 vols. (西藏大蔵経研究会、1955-1961)
- ・『影印北京版西藏大蔵経総目録附索引』(鈴木学術財団、1961)
- ・『大谷大学図書館蔵西藏大蔵経甘殊爾勘同目録』3 vols. (大谷大学図書館、1930-1932)
- ・『大谷大学図書館蔵西藏大蔵経丹殊爾勘同目録』9 vols. (大谷大学図書館、大谷大学真宗総合研究所、1965-1997)